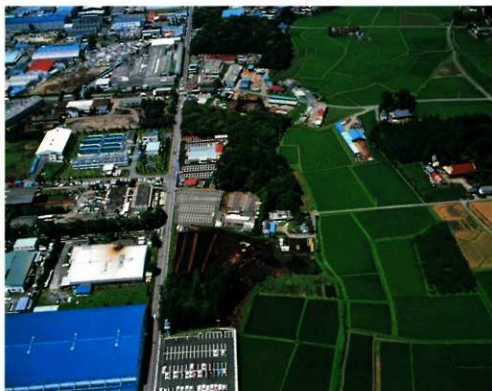


うわ の
上 野 遺 跡

— 推定東山道関連遺跡 —

平成10年3月

宇都宮市教育委員会



上野遺跡全景（南から）



上野遺跡全景（真上から）

序

古代、うつのみやは河内郡に属し、池辺郷、大統郷、刑部郷、衣川駅家の諸郷があったと言われています。このうちの衣川駅家は古代の東山道沿いに置かれた公的な施設の1つで、ここを通過して、多くの中央官人や軍隊が都と陸奥国を行き来していました。

昭和63年度に本県で初めて東山道と推定される遺跡が発見されて以来、現在までに10カ所ほどの関連遺跡が確認されております。そして、その点と点を結ぶことにより、おおよそ県内のどの辺りを東山道が通っていたかが分かってまいりました。

本市内においてもそれと推定される遺跡が2カ所確認されており、その内の1つが上野遺跡であります。本書はその調査成果をまとめたものであり、東山道のルート解明、さらには下野の古代史解明の一助となれば幸いです。

末文になりましたが、発掘調査にあたりご指導を頂きました諸先生方並びに、調査にご理解、ご協力を頂きました地権者並びに開発関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

宇都宮市教育委員会
教育長 大塚 一之

例 言

1. 本書は、平成4年5月21日～5月30日にかけて行われた上野遺跡Ⅰ次調査と平成5年5月19日～7月23日にかけて行われた上野遺跡Ⅱ次調査の調査報告書である。尚、本遺跡は宇都宮市平出町4144-1他に所在し、パチンコ店建設に先立つ発掘調査である。
2. 調査面積は、第Ⅰ次調査が600㎡、第Ⅱ次調査が約4,500㎡である。
3. 遺跡地における測量、写真撮影等は清水豊、杉山邦康の協力を得て、梁木誠、大塚雅之、神野安伸、今平利幸がこれにあたった。
4. 遺構・遺物の整理、実測写真撮影等は、福田貴久栄、鈴木道子、鈴木芳子、樋口静子、大森八重子、大野節子、賀来孝代、大澤順子、君島朱美、岡田有紀子の協力を得て、今平利幸がこれにあたった。
5. 本書の執筆は、今平が担当した。
6. 本遺跡出土の遺物及び図面・写真は、宇都宮市教育委員会にて保管している。
7. 発掘調査の関係者は次のとおりである。

〔指導助言〕 国士館大学教授	大川 清	
国学院大学教授	木下 良	
宇都宮大学教授	石部正志	
宇都宮市文化財保護審議委員	堀 静夫	
同	大金直亮	
同	橋本澄朗	

〔事務局〕

<第Ⅰ次調査時>	教育長	藤田昌平	文化財保護係長	定岡明義
	教育次長	近能忠良	文化財保護係	手塚英男
	文化課長	安達光政	同	梁木 誠
	文化振興係長	北条和久	同	小松俊雄
	文化振興係	湯沢孝夫	同	大塚雅之
	同	臼井成志	同	神野安伸
	同	高栖良子	同	今平利幸
<第Ⅱ次調査時>	教育長	藤田昌平	文化財保護係長	定岡明義
	教育次長	近能忠良	文化財保護係	手塚英男
	文化課長	横堀杉生	同	梁木 誠
	文化振興係長	湯沢孝夫	同	小松俊雄
	文化振興係	臼井成志	同	大塚雅之
	同	阿部邦男	同	神野安伸
	同	高栖良子	同	今平利幸
	同	小野敬子		


〔調査補助員〕

阿部昭、大垣俊亜、大垣ヤスヨ、木滑とみ、木滑一枝、鈴木銘一、高秀クニ、八百井トシ、矢田部敏雄、小沢一雄、高村士郎、吉沢角一郎、渡辺松雄、大塚清、小松寅雄、吉沢良助、熊田胖、高橋邦雄

8. 発掘調査及び報告書作成に関しては、次の諸機関、諸氏の御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略)

栃木県教育委員会文化課、栃木県埋蔵文化財センター、株式会社ステーク宮、作新学院社会クラブ、板橋正幸、井上滋、植木茂雄、大貫茂、大澤清美、加藤吉三、筒木理広、加部二生、木本雅康、木下実、上三川勝、小宮俊久、佐藤信、佐藤清一、坂爪久純、進藤敏雄、鈴木正博、田熊清彦、高橋史朗、塚本師也、中村紀男、中山晋、藤田直也、水沼良浩、吉沢豊一郎、吉沢丞、山口耕一

凡 例

1. 挿図の縮尺は、溝以外の遺構は1/60、遺物1/3で示した。また、遺物実測図番号と図版の遺物番号とは一致する。
2. 断面図基準線は標高であり、平面図の方位は磁北を示す。
3. 遺構実測図の土層説明においては、次の略号を使用した。
ロームブロック…ロームB 今市バミス…IP 七本桜バミス…SP 鹿沼バミス…KP 焼土粒…SY 炭化物…C
4. 土器観察表内の(H)は土師器を示し、(S)は須恵器を示す。
5. 遺構については、次の略号を使用した。
SI…竪穴住居跡 SB…掘立柱建物跡 SK…土坑 SX…不明
6. 遺構平面図内におけるスクリーントーン  は焼土範囲を示す。

目 次

序・例言・凡例

I はじめに

1 調査の経過と方法	1
2 遺跡の環境	3

II 調査概要

1 竪穴住居跡	7
2 掘立柱建物跡	10
3 溝	10
4 方形周溝遺構	18
5 土坑	18

III おわりに

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図	2	第11図 第I次調査区平・断面図	13・14
第2図 周辺遺跡分布図	4	第12図 第II次調査区溝平・断面図	15・16
第3図 第II次調査区遺構配置図	6	第13図 第II次調査区溝断面図	17
第4図 S I O 1 平・断面図	7	第14図 溝出土遺物実測図	17
第5図 S I O 1 出土遺物実測図(1)	7	第15図 S X O 1 平・断面図	19
第6図 S I O 1 出土遺物実測図(2)	8	第16図 土坑平・断面図	20
第7図 S I O 2 平・断面図	8	第17図 表採遺物実測図	22
第8図 S I O 2 出土遺物実測図	9	第18図 地形と東山道ルート推定ライン図	24
第9図 S B O 1 平・断面図	10	第19図 東山道ルート推定図	25
第10図 S B O 2 平・断面図	11	第20図 溝変遷模式図	26

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	5
第2表 S I O 1 遺物観察表	8
第3表 S I O 2 遺物観察表	9
第4表 溝遺物観察表	18
第5表 上野遺跡溝一覧表	24
第6表 県内推定東山道遺跡溝一覧表	24

写真図版

- PL 1 ①第Ⅰ次調査区遠景（東より） ②第Ⅰ次調査区北壁溝断面確認状況（南東より）
③北壁溝断面確認状況（南東より） ④SD01断面確認状況（南より）
⑤第Ⅰ次調査区完掘状況（南より） ⑥第Ⅱ次調査区遠景（南東より）
⑦調査風景（北西より） ⑧SI01完掘状況
- PL 2 ①SI02完掘状況 ②SI02遺物出土状況
③SK01・SX01確認状況（南東より） ④SX01（南より）
⑤SK01完掘状況 ⑥SB01完掘状況
⑦SK09完掘状況
- PL 3 ①第Ⅱ次調査区確認状況（北西より） ②SD01完掘状況（南より）
③SD01埋土状況（南より） ④SD02完掘状況（南より）
⑤SD02埋土状況（南より） ⑥SD02遺物出土状況（南より）
⑦SD02（南より） ⑧SD02遺物出土状況（北西より）
- PL 4 ①調査風景 ②SD03完掘状況（北より）
③SD03埋土状況（南より） ④SD01・SD02（南より）
⑤SD01～SD03（南より） ⑥SD02・SD03（南より）
⑦SD02・SD03（北より）
- PL 5 ①SI01出土遺物（第5図） ②SI01出土遺物（第6図5）
③SI01出土遺物（第6図6） ④SI01出土遺物（第6図7）
⑤SI02出土遺物（第8図1・2） ⑥SI02出土遺物（第8図3）
⑦SI02出土遺物（第8図4）
- PL 6 ①溝出土遺物（第14図1） ②溝出土遺物（第4図9）
③「泉」墨書土器 ④溝出土遺物（第4図10）
⑤溝出土遺物（第4図11） ⑥溝出土遺物（第4図12）
- PL 7 ①表採遺物



現説風景

I. はじめに

1 調査の経過と方法

本遺跡は、それまで未登録であったため、工事中に発見された遺跡である。発見までの経過は、次の通りである。

パチンコ店建設に伴う造成工事に際し、その土取りの断面に2本の溝状の遺構があるのを加藤吉三氏が発見した。この件に関し、氏より宇都宮市教育委員会に通報が入り、文化財担当者が現地へ赴き、状況を確認した結果、古い遺構である可能性が高いと判明し、地権者の吉沢豊一郎氏と協議し、緊急の確認調査を行うこととした。

既に工事開始後であったため、工事工程を一部変更してもらい、一部の面的調査と開発区域における南と北側の断面観察を行った。

調査方法は、開発区北端から南へ約30mのところの350㎡とさらに20m南の250㎡の計600㎡を面的に調査し、開発区の北面と南面の断面図を作成することにより、2本の溝の繋がりが具合を押さえることとした。

以後、これを第Ⅰ次調査区と呼ぶ(第1図参照)。

翌年、この開発区の北側50mのところ、同様の開発が行われるとの連絡が文化課に入り、地権者の吉沢丞氏と開発主体者である株式会社ステーク宮の大澤清美氏と協議し、4月22～23日に確認調査を行うこととした。

調査は幅約2mのトレンチを20m間隔で入れて確認した。その結果、前年度に確認された遺構のつながりと考えられる2本の溝が確認できた。これをもとに再度3者で協議を行った結果、発掘調査をして記録保存をするも止むなしとの結論に至り、約2か月間の調査が決定され、5月19日から調査を開始することとなった。

調査の方法は、開発面積が2,800㎡とそれほど広くないことから、当初から全面表土剥ぎをし、面的な調査とした。

以後、これを第Ⅱ次調査区と呼ぶ(第1図参照)。

尚、発掘調査の経過は次のとおりである。

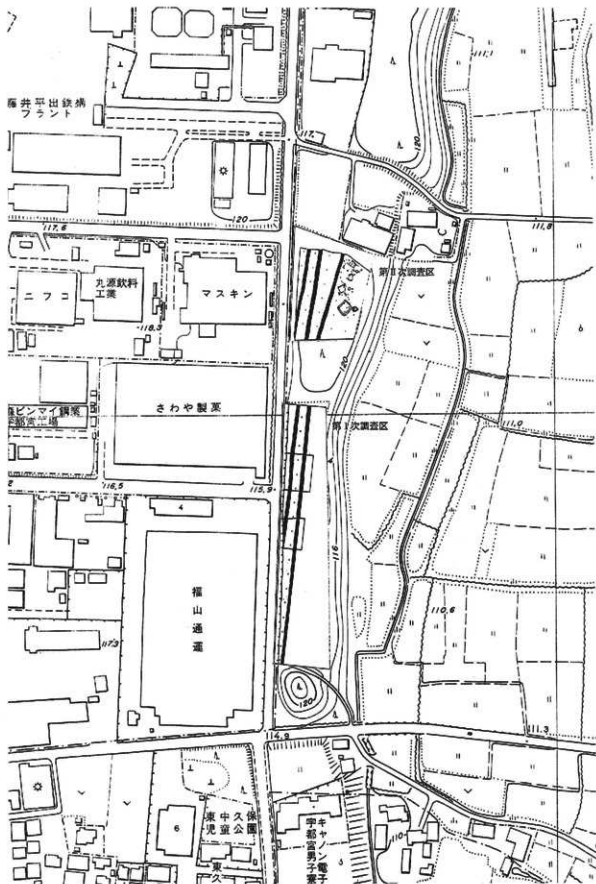
(発掘日誌抄)

<第Ⅰ次調査>

- 5月21日～23日 重機により表土剥ぎ後、SD01, SD02の掘り下げ。
- 5月24日・25日 遺構平面図、セクション図作成。
- 5月26日～28日 土取りにより露呈した断面のセクション図作成、記録写真を撮る。
- 5月30日 作新学院社会クラブの生徒の協力により、追加調査を行う。

<第Ⅱ次調査>

- 5月19日～30日 重機により表土剥ぎ後、SD01, SD02, SD03の掘り下げ。
- 6月1日・2日 SD02, SD03セクション図作成。
- 6月10日・11日 SD02遺物出土状態図作成。
- 6月14日～17日 SD01, SD02掘り下げ、SD03遺構平面図作成。



第1図 調査区位置図

- 6月18日～22日 SK01, SX01掘り下げ。
- 6月26日 現地説明会を開催。
- 6月28日 SK01, SX01セクション写真撮影。
- 7月1日 SD03清掃後完掘写真撮影。
- 7月2日 SD02清掃後完掘写真撮影。
- 7月5日 SD01清掃後完掘写真撮影。
- 7月7日 SB01, SI01, SI02清掃後完掘写真撮影。
- 7月8日～26日 遺構平面図作成。



調査風景

2 遺跡の環境

本遺跡は、鬼怒川右岸の標高118mの岡本台地縁辺に立地し、東側に広がる沖積地との比高は約7mである。遺跡の西側に隣接して昭和36年～45年にかけての平出工業団地造成により、地形が改変されてしまったが、この台地は、西方約2～3kmほど小さな浸食谷を含みながら平坦面が続く。因みに岡本台地は、北は河内町岡本周辺から南は上三川町街まで連なる台地である。

周辺遺跡としては、第2図からわかるように、本遺跡北方約100mのところ直径約10mの円墳と思われる免の内古墳(38)と、北東方約1.6kmのところ所在する中世の平出城跡(39)が確認できるのみである。

しかし、これは先にも述べたように昭和40年代の前半までに開発が進んでしまったことが大きな要因であり、聞き取り調査などでは平出工業団地造成の際に土器が出土したとの情報も入手できることから、もっと多くの遺跡が周辺にあったものと考えられる。

古代に絞って、もう少し広く見てみる。

同様の遺構が確認されている遺跡は、南方約9kmのところの杉村遺跡、北方約3kmのところの釜根遺跡(12)、さらにそれより北東方約1kmのところ日枝神社南遺跡(11)など県内において現時点で10か所ある。

当時の役所との位置関係は、下野国府が直線距離で約25km、河内郡衙跡と推定されている多功遺跡が直線距離で約16km、そして、東方約2.5kmのところ「烽家」と書かれた墨書土器を出土した飛山烽跡が所在する。

また、集落との関係では、本遺跡と杉村遺跡とのライン上に刑部郷と推定されている瑞穂野工業団地内遺跡が所在する。



第2図 周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

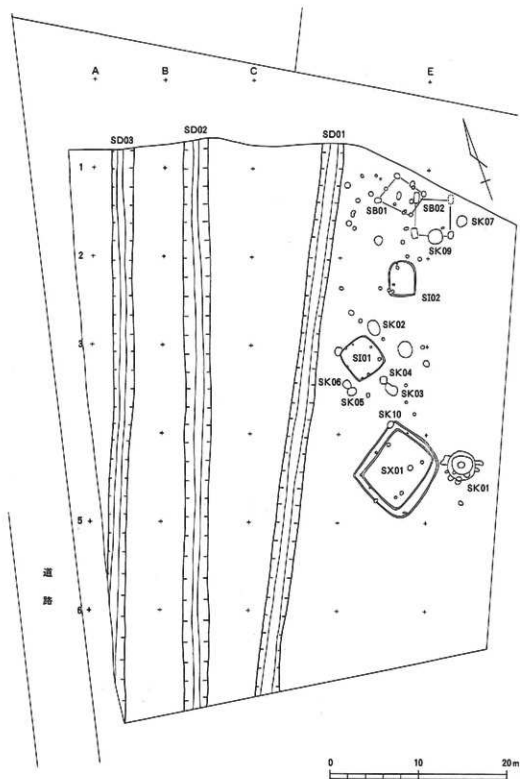
■ 塚・古墳 ● 窯跡等

No.	遺跡名	所在地	時期	種別	備考
1	上野遺跡	上野町	縄文・平安	集落・道	
2	上の台遺跡	瓦谷町320-1他	古墳	集落跡	
3	北ノ館跡	瓦谷町46他	中世	城館跡	
4	北山古墳群	瓦谷町32-2他	古墳	古墳群	前方後円墳3基、円墳5基
5	関堀土用遺跡	関堀町1048他	古墳	集落跡	
6	川俣大塚古墳	川俣町192他	古墳	古墳	前方後円墳
7	谷口山古墳群	長岡町1176他	古墳	古墳群	円墳5基
8	戸用地遺跡	関堀町291-1他	古墳	集落跡	
9	堀之内遺跡	岩曾町658-1他	縄文	集落跡	
10	御上人塚	今泉町387-3他	江戸	高塚	
11	日枝神社南遺跡	河内町	奈良・平安	道跡	
12	釜根遺跡	河内町	奈良・平安	道跡	
13	同慶寺館跡	竹下町1107他	中世	城館跡	
14	竹下浅間山古墳	竹下町1100-5他	古墳	古墳	
15	飛山城跡	竹下町393-6他	平安・中世	烽跡・城跡	
16	竹下遺跡	竹下町712他	縄文	集落跡	
17	仙波ヶ原遺跡	竹下町1412他	縄文・古墳	集落跡	
18	鑑山東原遺跡	鑑山町191-1他	縄文・奈・平	集落跡	
19	西原庚申塚群	上籠谷町2035他	江戸	庚申塚	
20	上籠谷笹塚古墳	上籠谷町1596他	古墳	古墳	円墳
21	西向遺跡	上籠谷町1597他	奈良・平安	集落跡	
22	上籠谷和尚塚	上籠谷町1779他	江戸	高塚	
23	山下台高塚群	下平出町1019-1他	江戸	高塚	2基
24	石井城跡	石井町1721他	中世	城館跡	
25	三日月神社古墳群	石井町3295他	古墳	古墳群	円墳5基
26	久部浅間山古墳	石井町3226他	古墳	古墳	前方後円墳
27	久部愛宕塚古墳群	石井町3203-1他	古墳	古墳群	前方後円墳1基、円墳3基
28	根本西台古墳群	西刑部町2500他	古墳	古墳群	円墳2基、横穴式石室
29	柿木坂遺跡	上桑島657他	縄文・古墳	集落跡	
30	十ヶ屋敷遺跡	平松本町767-1	古墳～平安	集落跡	
31	追金仏遺跡	下栗町804-1他	縄文・古墳	集落跡	
32	大塚神社古墳群	下栗町1099-1他	古墳	古墳群	円墳2基
33	下栗大塚古墳群	下栗町1382他	古墳	古墳群	円墳2基
34	大久保台山遺跡	下栗町536他	古墳～平安	集落跡	
35	天王山古墳群	下栗本町744-1他	古墳	古墳群	円墳3基
36	さるやま城遺跡	下栗町571他	古墳・中世	古墳・城跡	前方後円墳1基、円墳10基
37	東原古墳群	下栗町740他	古墳	古墳群	
38	免の内台古墳	平出町4106他	古墳	古墳	円墳1基
39	平出城跡	平出町1512他	中世	城館跡	

第1表 周辺遺跡一覧表

II. 調査概要

第I次調査区では2本の溝を確認し、第II次調査区では3本の溝と縄文時代の住居跡2軒、時期不明の掘立柱建物跡2棟、方形周溝遺構1基、土坑10基を確認した。以下、遺構毎に述べる。



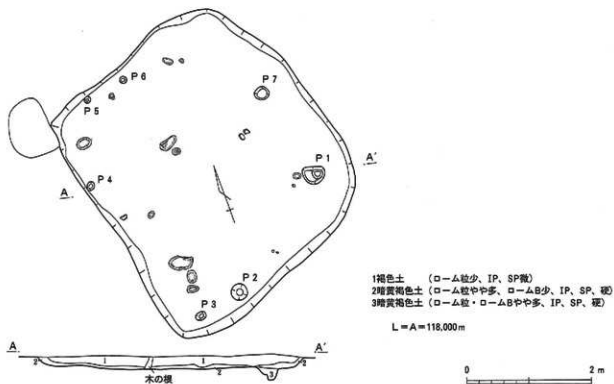
第3図 第II次調査区遺構配置図

1 竪穴住居跡

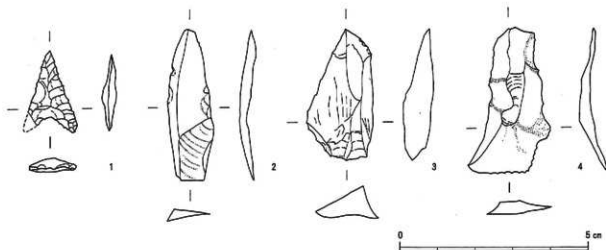
第II次調査区北東部の台地縁辺側より縄文時代の竪穴住居跡を2軒確認した。

SI01 (第4～6図・第2表)

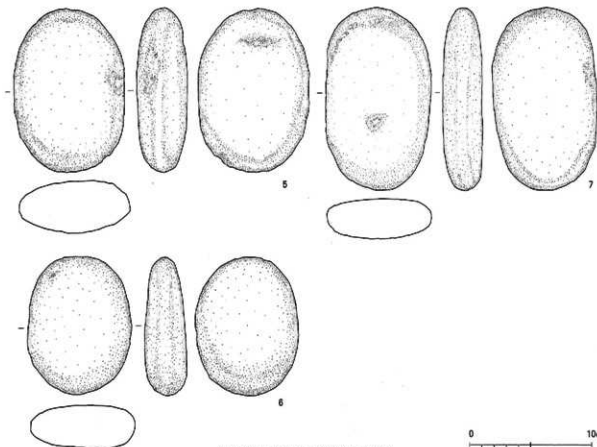
位置 II次調査、D-3杭付近。平面形 南北4.3m×東西3.8mの隅丸方形 柱穴 P1～P7の壁際に7本、床面からの深さは10～20cmと浅目である。炉 中央やや北よりに床が焼けている部分が存在し、範囲は広くないが、この部分が地床炉と考えられる。埋土状況 自然堆積 遺物 石鏃及び、床面から焼けた磨石等が出土した。



第4図 SI01平・断面図



第5図 SI01出土遺物実測図(1)



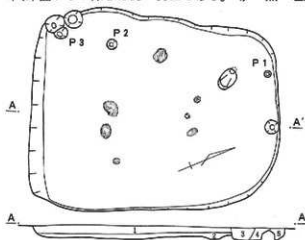
第6図 SI01出土遺物実測図(2)

No	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石質	備考
1	石	2.1	1.4	0.35		チャート	
2	フ	4.0	1.1	0.3		チャート	
3	レ	3.5	1.8	0.8		チャート	
4	フ	3.8	1.7	0.4		チャート	
5	磨	13.2	8.4	4.1	650	安山岩	片面に使用痕あり
6	磨	11.15	13.5	3.35	413	安山岩	片面に使用痕あり
7	磨	14.7	8.4	3.25	620	安山岩	片面に使用痕あり

第2表 SI01遺物観察表

SI02 (第7~8図・第3表)

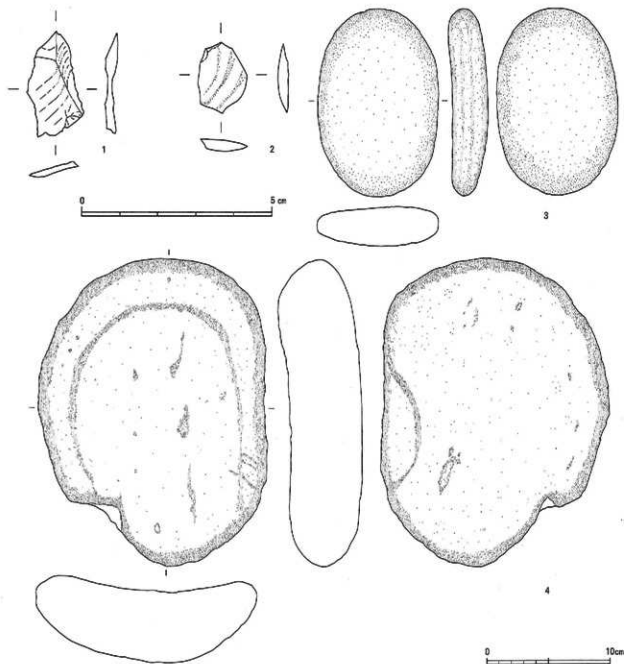
位置 II次調査、E-2杭付近。平面形 南北4.0m×東西3.1mの隅丸長方形 柱穴 P1~P3の西壁際に3本、床面からの深さは15~30cmである。炉 無 埋土状況 自然堆積 遺物 床面から磨石、石皿が出土した。



第7図 SI02平・断面図

- 1褐色土 (ローム粒少、IP、SP、硯)
- 2暗褐色土 (ローム粒やや多、小ロームB、IP、SP、硯)
- 3黒褐色土 (ローム粒少、IP、SP)
- 4暗褐色土 (ローム粒やや多、ロームB少、IP、SP)
- 5暗黄褐色土 (ローム粒多、小ロームB少)

L-A=117,90m



第8図 SI02出土遺物実測図

No	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石 質	備 考
1	フ レ ー ク	2.25	1.3	0.2		チャート	
2	フ レ ー ク	1.85	1.3	0.25		チャート	
3	磨 石	14.5	9.7	2.9	680	安山岩	
4	石 皿	24.55	17.7	5.6	4000	安山岩	使用痕あり

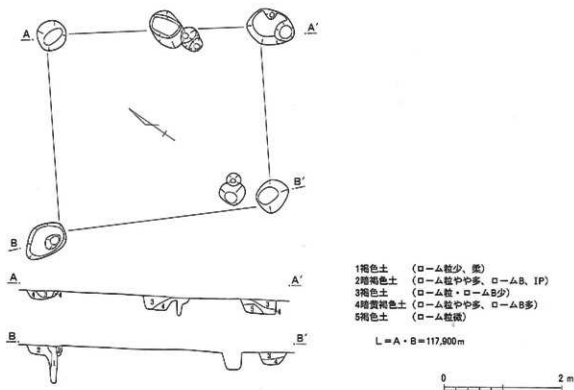
第3表 SI02遺物観察表

2 掘立柱建物跡

第Ⅱ次調査区北東隅の台地縁辺側より2棟の掘立柱建物跡を確認した。この他にも柱穴と見られるピットが存在することから、これ以外にも建物があった可能性がある。

SB01 (第9図)

位置 Ⅱ次調査、E-1杭付近。平面形 南北3.8m×東西3.2mの長方形であるが、やや歪んでいる。柱穴 5本、平面形は不整な楕円形で、深さは15~20cmと浅目である。備考 SB02と重複する。



第9図 SB01平・断面図

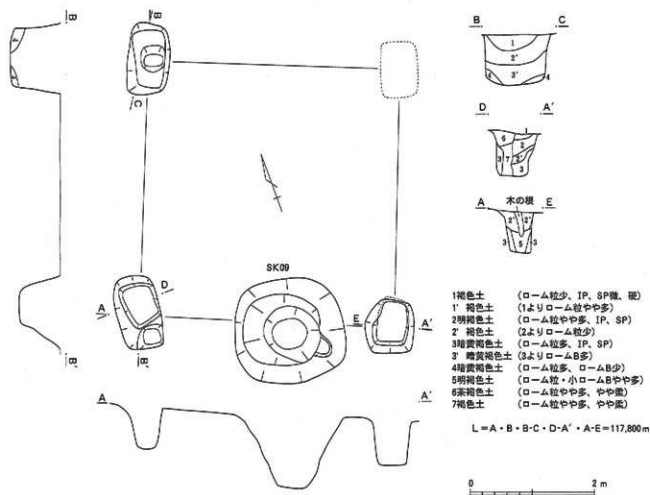
SB02 (第10図)

位置 Ⅱ次調査、E-1杭付近。平面形 一辺4.0mの正方形。柱穴 北東角の1本は未確認、他の3本の掘り方は長軸85~120cm、短軸70~80cmの長方形の平面プランで、深さは65~80cmを測る。A'-D, A-Eセクションで15~20cmの柱痕が確認できた。備考 SB01、SK09と重複する。

3 溝 (第11~13図)

第Ⅰ次調査ではSD01とSD02の2本を、第Ⅱ次調査ではSD01~SD03の3本の溝を確認した。第12図からわかるようにSD03は現在の道路によって削平されてしまい、南側にどのように続いていたかは不明である。Ⅱ次調査区域に限ってだけ見れば、SD03とSD02はほぼ平行に走り、SD01は北に向かうにしたがって、他の2本の溝よりも東に振れる。

以下、それぞれの調査次毎に記載する。



第10図 SB02平・断面図

(第1次調査区)

調査の経過のところでも述べたように、部分的な調査ではあるが、それらをつなぎ合わせると約180mにわたり2本の溝が平行していることがわかる。第11図はその平面図であるが、A地区は完掘し、B地区は、一部溝を掘り下げたが、その他の部分は平面プランを確認するのみにとどめた。また、断面は、A地区で3本とった他に、調査区の北側(B-B')と南側(A-A')の2本である。SD01とSD02の心々距離は8~8.5mを測る。仮にその2本の溝の間が路面とするならば、その幅は確認面で6mであるが、第11図のセクションを見ると、黒色地山(II層)から掘り込まれていることがわかり、多少の崩れを考慮しても4.5~5m程である。それぞれの溝の形態及び規模については次のとおりである。

SD01は、断面逆台形で、底部中央に浅い一段の掘り込みが見られる。この浅い掘り込みは場所によっては幅70~80cm、深さ5~15cmのもので、面的にもその痕跡が認められることから、掘り直しの結果で新旧2時期あると考えられる。仮に、古をSD01a、新をSD01cとした場合、それぞれの規模は、復元値で、SD01aが下幅0.7~0.8m、深さ1.4m、SD01cが上幅3.4m、下幅1.4m、深さ1.3mを測る。

SD02は、断面逆台形であるが、上場から下場にかけてまずは30~35°の緩い傾斜で、深さ80cmのところまで傾斜角度が50~60°と急になり下場に至る。またSD01に比べると底面幅も狭く、形態上の違いを見せる。

これも掘り直しによるものと考えられ、古をSD02 a、新をSD02 bとしてみると、それぞれの規模は、SD02 aが下幅0.4m、深さ1.1m、SD02 bが上幅3.3m、下幅0.7m、深さ1.15mを測る。

(第Ⅱ次調査区)

本調査区では3本の溝が確認できた。第Ⅰ次調査区におけるSD01とSD02の続きと、新たにその西側からSD03が確認できた。SD03は調査区南端ですでに現在の道路により削り取られてしまっており、その続きについては不明である。第Ⅰ次調査区では、SD01とSD02が平行していたが、本調査区ではSD01は北に向かうにしたがってSD02との間隔が広がり、この部分だけ見れば、SD02とSD03が平行している。それぞれの心々距離は次の通りである。

SD01とSD02は、調査区南端で8m、北端で15mを測る。SD02とSD03は、調査区南端で9m、北端で8.5mを測る。SD01とSD03は、調査区南端で18m、北端で24mを測る。

次に各溝について見てみる。

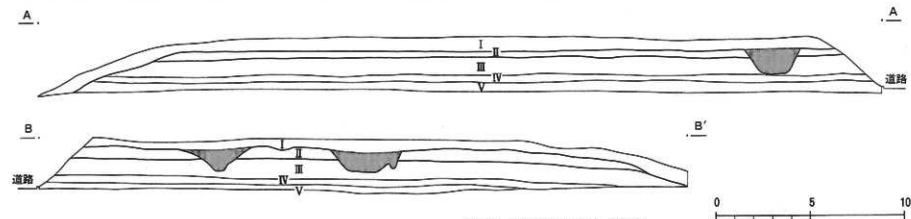
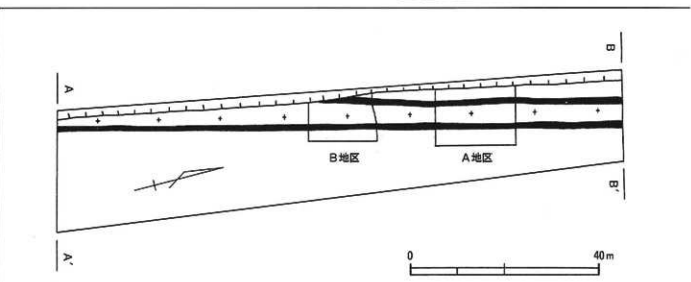
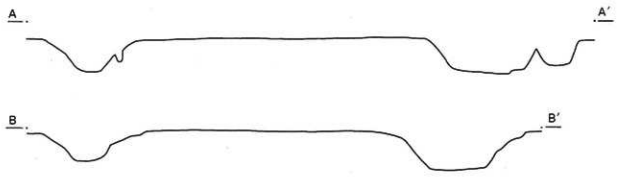
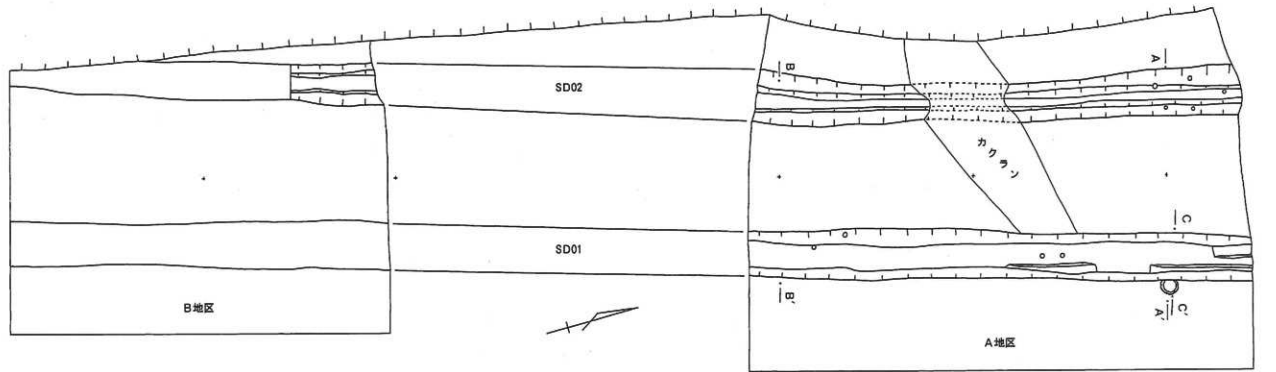
SD01は、第Ⅰ次調査区の観察と同様、断面逆台形で、底部中央に浅い一段の掘り込みが見られる。ここでも掘り返しの状況が観察できる。さらに、A-A'を見ると、7層がローム粒の少ない層に対し、9層はロームBを含みやや硬い層であることから、これも掘り返しの結果と考えられ、ここでは2回の掘り返しがあったと判断できる。SD01 aが下幅0.7~0.8m、深さ1.3m、SD01 bが下幅1.1m、深さ1.2mを測る。SD01 cが上幅3.1m、下幅0.6~1.4m、深さ1.0mを測る。尚、SD01 cは断面U字形である。尚、溝の1層中より須恵器杯(1・2)が出土した。

SD02は、A-A'、F-F'ラインまでは第Ⅰ次調査区と同様な断面形態を示すが、B-B'ラインから北側は溝の上幅が広がり、グラッとした形状になる。ここでも1回の掘り返しの状況が観察できる。SD02 aが下幅0.6~0.8m、深さ1.3m、SD02 bが上幅3.6m、下幅0.9m、深さ1.2mを測り、断面U字形を呈する。

尚、溝の1層中から土師器杯(10)が正立の状態出土した。また、この層とほぼ同様の層から須恵器杯、盤(3~12)なども出土した。

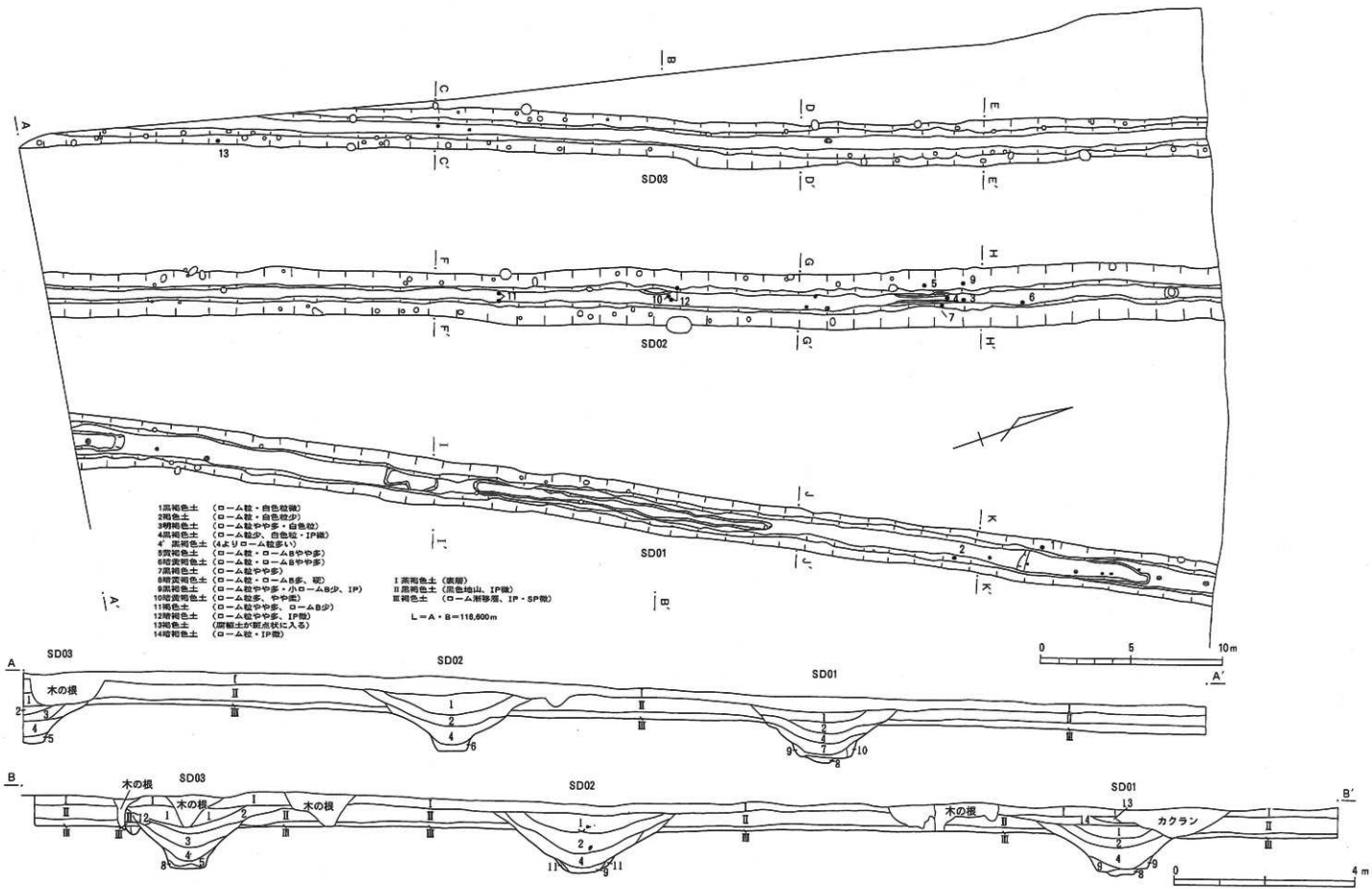
SD03は、他の2本の溝に比べると上幅が狭く、深さも若干浅めである。SD01の観察同様、4'層に比べ5層がロームBを多く含む非常に硬めであることから、4'層と5層の間で1回の掘り返しと考えられる。埋土状況を見ると、SD01とSD02が1, 2, 4層であるのに対し、SD03は2層と4'層の間に3層が入る点、他の溝と若干の違いを見せる。SD03 aが下幅0.8m、深さ1.3m、SD03 bが上幅2.6m、下幅0.4m、深さ1.2mを測る。尚、埋土中より土師器杯が出土した。

この他に、何れの溝においてもピットが堀底及び壁中に存在するが、均等に並ぶわけでなくその性格については不明である。



- I 表層
 - II 黒色層
 - III ロ-△層 (田原)
 - IV ブラックバンド
 - V ロ-△層 (宝木)
- L=A-B=118,700m

第11図 第1次調査区平・断面図



第12図 第II次調査区溝平・断面図

№	器種	寸法(cm)	器形・調査の特徴	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
1	環(S)	口 13.5 高 4.0 底 6.4	平底で、やや内湾気味に立ち上がる。 口クロ成形、回転糸切り。	灰褐色	砂粒、小石	良	SD01 1層	1/8 残存
2	環(S)	底 5.4	平底。口クロ成形、回転糸切り。	灰色	白色砂粒	良	SD01 1層	1/8 残存
3	環(S)	底 5.4	上げ底。口クロ成形、回転糸切り。	灰色	白色砂粒	良	SD02 1層	1/4 残存
4	皿(S)		胴縁外面平行タタキ。	灰色	砂粒	良	SD02 1層	破片
5	環(S)	口 14.2	やや内湾気味に立ち上がる。口クロ成形。	灰色	白色砂粒	良	SD02 1層	破片
6	環(S)		口クロ成形。	灰色	白色砂粒	良	SD02 1層	破片
7	環(S)	底 6.0	低い高台が付く。口クロ成形、回転糸切り。	灰色	砂粒、赤色スコリア粒	良	SD02 1層	1/4 残存
8	皿(S)		口クロ成形。	灰色	砂粒、小石	良	埋土中	1/4 残存
9	環(S)	口 13.6 高 6.6 底 4.1	上げ底で、やや内湾気味に立ち上がる。 口クロ成形、回転糸切り。	灰色	白色砂粒	良	SD02 1層	底面外面に「家」黒色施装
10	環(H)	口 12.0 高 3.35 底 7.2	平底で、やや内湾気味に立ち上がり、口唇部を積み上げる。 口クロ成形、回転糸切り、内面ヘラミダキ	淡褐色	赤色スコリア粒、 礫石	良	SD02 1層	完形 内部黒色施装
11	環(H)	口 11.6 高 3.6 底 7.0	平底で、やや内湾気味に立ち上がり、口唇部を積み上げる。 口クロ成形、回転糸切り、内面ヘラミダキ	淡褐色	赤色スコリア粒、 礫石	良	SD02 1層	完形 内部黒色施装
12	皿(S)	口 22.1 高 4.0 底 13.3	口縁部が直立し、底面に高台を付す。 口クロ成形、回転糸切り。	青灰色	砂粒	良	SD02 1層	1/3 残存
13	環(H)	口 11.6 高 3.0 底 7.2	平底。 口クロ成形、回転糸切り、内面ヘラミダキ	淡褐色	赤色スコリア粒、 礫石	良	SD03 1層	1/8 残存 内部黒色施装

第4表 溝遺物観察表

4 方形周溝遺構

SX01 (第15図)

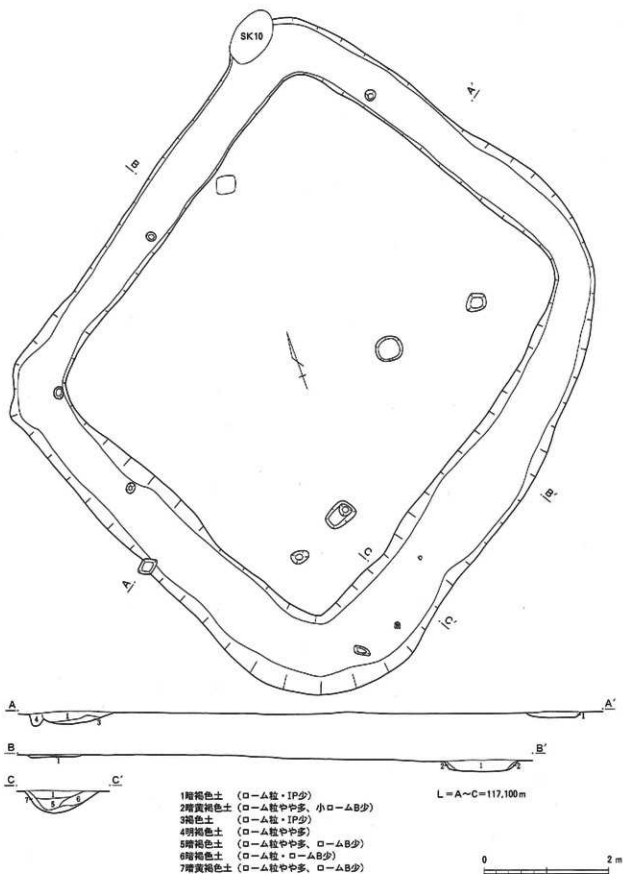
第Ⅱ次調査区東側のE-4杭付近に位置する。周溝内側の規模は、長軸7m、短軸5.9m、周溝を含めた規模は、長軸8.5m、短軸7.7mを測り、平面が長方形を呈する。溝の幅は、南コーナーが1.3mと広いほかは、0.6m～1.0mやや狭い。溝の深さも、南コーナーが35cmと深いほかは、5～10cmと非常に浅く、底面は平坦である。溝埋土中から、ハケ甕の小片が出土した。

5 土 坑

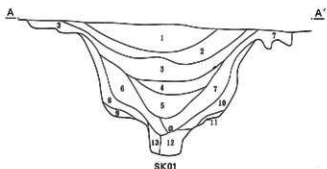
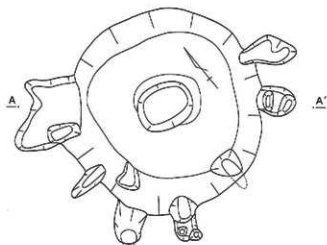
第Ⅱ次調査区内で9基の土坑を確認した。以下それぞれの土坑について見てみる。

SK01

方形周溝遺構の東側に隣接する。直径約3.3mの円形で、確認面からの深さは約2.1mである。南半分の上



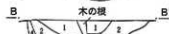
第15図 SX01平・断面図



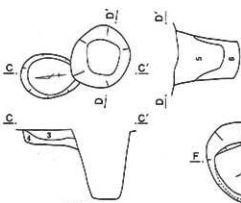
SK01

SK01

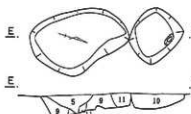
- 1黒褐色土 (ロ-ム粒・白色砂粒少)
- 2暗褐色土 (ロ-ム粒・白色砂粒少)
- 3褐色土 (ロ-ム粒やや多・IP)
- 4明褐色土 (ロ-ム粒多・ロ-ムBやや多)
- 5黒褐色土 (ロ-ム粒やや多・ロ-ム少)
- 6暗褐色土 (ロ-ム粒・C少、IP、SP)
- 7暗褐色土 (ロ-ム粒やや多・C少、IP)
- 8暗黄褐色土 (ロ-ム粒多、IP)
- 9暗褐色土 (ロ-ム粒少、IP)
- 10暗黄褐色土 (ロ-ム粒多)
- 11暗褐色土 (ロ-ム粒少、IP)
- 12暗褐色土 (ロ-ム粒やや多・C少、SY)
- 13暗褐色土 (ロ-ム粒・C少)



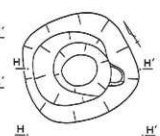
SK02



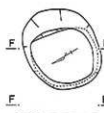
SK05・06



SK03・04



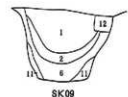
SK08



SK07



SK10



SK09

SK02~10

- 1褐色土 (ロ-ム粒少、IP、SP)
- 2明褐色土 (ロ-ム粒やや多、IP・SP少)
- 3暗黄褐色土 (ロ-ム粒少・ロ-ムB多)
- 4黄褐色土 (ロ-ム粒多)
- 5暗褐色土 (ロ-ム粒数、IP・SPやや多、非常に硬)
- 6暗黄褐色土 (ロ-ム粒多、IP・SP少、非常に硬)
- 7暗黄褐色土 (IPやや多、SP少)
- 8暗褐色土 (IP多)
- 9暗褐色土 (ロ-ム粒やや多、IP・SP少)
- 10暗褐色土 (ロ-ム粒少、IP、SP)
- 11暗黄褐色土 (ロ-ム粒・ロ-ムBやや多)
- 12茶褐色土 (ロ-ム粒数)
- 13黒褐色土 (ロ-ム粒少、褐色土を斑点状に入る)
- 14褐色土 (ロ-ム粒やや多)

L = A = 117,700m
 B ~ E・H = 118,000m
 F・G = 117,200m



第16図 土坑平・断面図

場には柱穴状のビットが8本確認できた。それぞれのビットは楕円形状で、やや斜めに掘られている穴が多い。断面は二段に掘られる。下段中央のビットの大きさは、長軸85cm、短軸70cmの楕円形で、深さは約40cmである。この下段の掘り込みは鹿沼軽石層に達する。また、このローム及び鹿沼軽石層の壁面が焼けた状態である。

埋土状況は、4・5層がローム粒、ロームBを多く含み人為的な埋土状況を示すが、その他の層は自然堆積層である。尚、12・13層はほぼ同様の層であるが、13層に比べ12層の方が焼土を多く含む。

SK02

SI01の北東側に近接して位置する。長軸2m、短軸1.4mの楕円形で、深さは約35cmである。埋土状況は自然堆積であるが、非常に固く締まっている。

SK03・SK04

SK03をSK04が切る。SK03は長軸約1.05m、短軸約1.0mの不整形で、深さは約30cmである。SK04は長軸約0.8m、短軸約0.7mの隅丸方形で、深さは約25cmである。

SK05・SK06

SK06をSK05が切る。SK05は長軸約1.0m、短軸約0.7mの楕円形で、深さは約20cmである。SK06は長軸約1.0m、短軸約0.9mの隅丸方形で、深さは約1.1mである。

SK07

SB02の東側に近接して位置する。長軸1.3m、短軸1.15mの隅丸方形で、深さは約60cmである。下場が上場に対しオーバーハングし袋状を呈する。埋土状況は自然堆積であるが、非常に固く締まっている。

SK09

SB02と重なる。長軸1.8m、短軸1.7mの隅丸方形で、深さは約1.15mである。11層はローム粒を多く含む固く締まる。1、2、6層は自然堆積である。

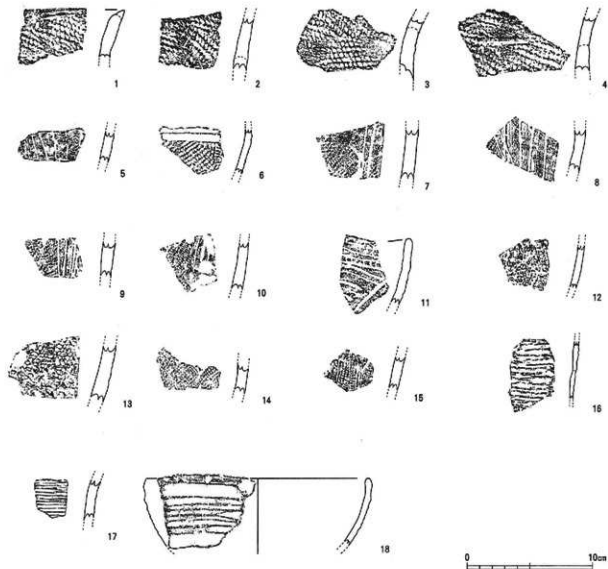
SK10

方形周溝遺構を切る。長軸1.0m、短軸0.55mの楕円形で、深さは約75cmである。埋土状況は自然堆積である。

6 その他

第17図 1～18は表採及び溝埋土中からの出土である。

1～4はR Lの単節縄文を施文する。いずれもSD02埋土中からの出土であり、同一個体と考えられる。尚1は口縁部破片である。5は5条の沈線を垂下させる。6はL Rの単節縄文を施したのち、2条の沈線を横位に巡らす。7～10は単節縄文を施文後、集合沈線を垂下させる。11は半截竹管による平行沈線文と爪形文を施す。14と15は摺糸文を施す。16と17は条痕文を横位に施す。尚、16は竹管状の工具による条痕。18は口径推定18cmの浅鉢で、口縁部に眼鏡状文の名残りをとどめ頭部は無文帯を有し、体部上半に7条の浮線を施す。また、一部に菱形の削りを施す。尚、口縁部外面の一部に漆が付着する。



第17図 表採遺物実測図

Ⅲ. おわりに

本遺跡は、縄文時代と古代の複合遺跡である。縄文時代に属するものは堅穴住居跡2軒である。これらの住居跡からは、縄文土器小片しか出土せず、細かい時代設定は難しいが、周辺から表採した土器が縄文前(11, 諸磯式)後(7~10, 堀之内式)・晩期(17・18, 水I式)の土器片であることから、その時期に当たるとの思われ、さらに住居跡の平面プランが方形に近いことから、縄文前期もしくは晩期の可能性が考えられる(石野 1990)。尚、16の土器は水神平段階の条痕文系土器と考えられる(注1)。

次に、古代の溝と考えられる3本の遺構について若干の検討を加えてみる。

第5表は各溝の規模及び形状をまとめたものである。

掘り返しは、SD01が2回、SD02が1回、SD03が1回観察でき、SD01とSD02では箱形→舟底状への変化が見られる。また、埋土状況は3本とも自然堆積であり、特にSD01とSD02が1・2・4層と同様な埋まり方をするのに対し、SD03は3・4層と別な層が入る。尚、何れの溝からも第1層より9~10世紀の土器が出土している。

各溝間の幅は、SD01とSD02が第1次調査区では、心々距離が8.5mと一定なのに対し、第2次調査区の南壁で8.5mだったものが60m北に行ったところでは16mと倍近くに幅が広がる。尚、8.5mの区間は第1次調査区と合わせて約140mである。SD02とSD03の心々距離は、第2次調査区のみであるが、調査区南で9.5m、調査区北で8.5mと1mほど狭くなる。このままの方向で行くと約500m先で2本の溝がぶつかることになる。SD01とSD03の心々距離は、調査区南で18m、調査区北で24.5mである。

調査区の東西幅が約30mと狭いことからさらに西側に未確認の溝がある可能性は残るが、ここでは現時点で確認できている3本の溝ということでその変遷を考えてみる。

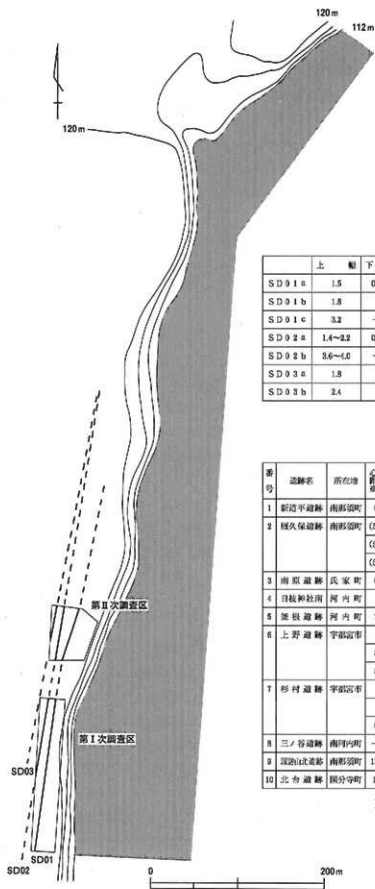
まず、近年栃木県内で確認された推定東山道遺跡について第6表にまとめてみた。未だ報告書が刊行されていないものもあり、現説資料などを参考に纏めているため、不明な点は空欄にしてある。また、数値に関しては基本的に提示されている数値の平均値を記載してある。尚、断面の形状を表す用語としては、各報告者まちまちであり、ここでは、台形・箱形を逆台形と類似と見なし、皿状・舟底状・半円形をU字形と類似と見なして、表の方では逆台形=A、U字形=Bで表した。

表からわかることをまとめてみると、

①心々距離は6~7m、9m、12~13mと3分類できる。木下良氏は全国的な視野に立っての検討により古代道の側溝間の心々距離が6・9・12のものが多いことを指摘している。また、同時に9・12mの道路は8世紀末に廃道になり、9世紀以降は6m前後の道幅を示すものが多いとのことである(木下 1993)。

近年調査の行われた杉村遺跡では、その出土土器から12m→13m→6mの変遷が指摘されている(安藤 1997他)。尚、この遺跡では、約460mにわたって確認されたが、台地部と低地部ではその道幅が違うとのことである。このように道路の幅は地形に左右され、このことは蔵久保遺跡で端的に示されている。この遺跡はI~IV期の変遷が考えられ、8~10世紀にかけて使用されていたと考えられているが、その間の道路幅はほぼ5~6mである。これは、この遺跡が丘陵を横断するような形で作道され、まさに地形に制約されていたため、当初からほぼ6mであったと考えられる。以上、一概にその道路幅により年代を決定することは難しいが、杉村遺跡の例からすれば、概ね木下氏の指摘通りと言える。

②側溝の形態については、A(逆台形)とB(U字形)の2通りが見られ、杉村遺跡の例をみると、A→B→Aの変遷が指摘されている。これに関しても、諏訪山北遺跡のように同一調査区内でAとBが共存する



第18図 地形と東山道ルート推定ライン

(m)

	上 幅	下 幅	深 さ	形 状	備 考
SD01a	1.5	0.7~0.8	1.3~1.4	逆台形	
SD01b	1.8	1.1	1.2	逆台形	
SD01c	3.2	—	1.0~1.3	U字形	第1派より9世紀の土器出土
SD02a	1.4~2.2	0.4~0.8	1.1~1.3	逆台形	
SD02b	3.6~4.0	—	1.2	U字形	第1派より9~10世紀の土器出土
SD03a	1.8	0.8	1.3	逆台形	
SD03b	2.4	0.8	1.2	逆台形	第1派より10世紀の土器出土

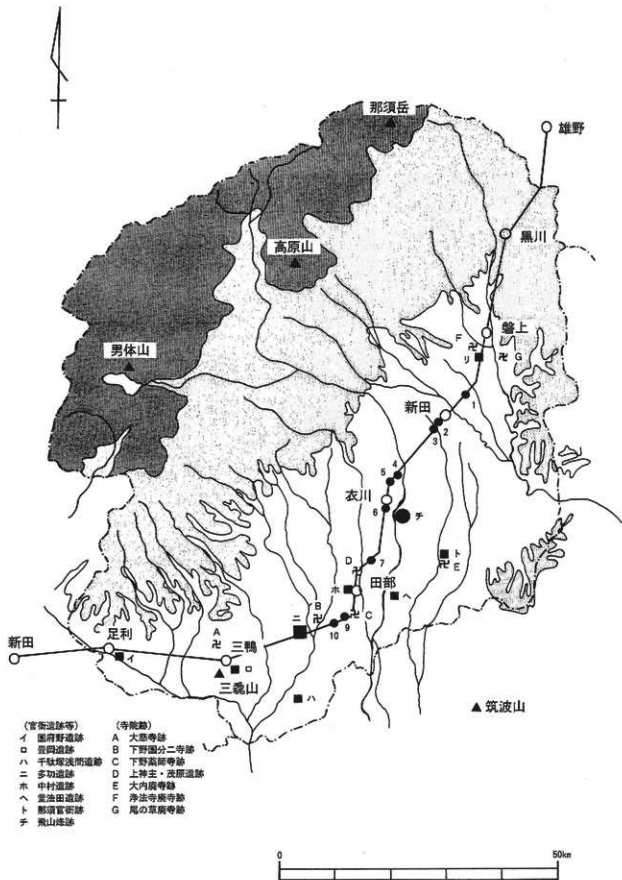
第5表 上野遺跡溝一覧表

(m)

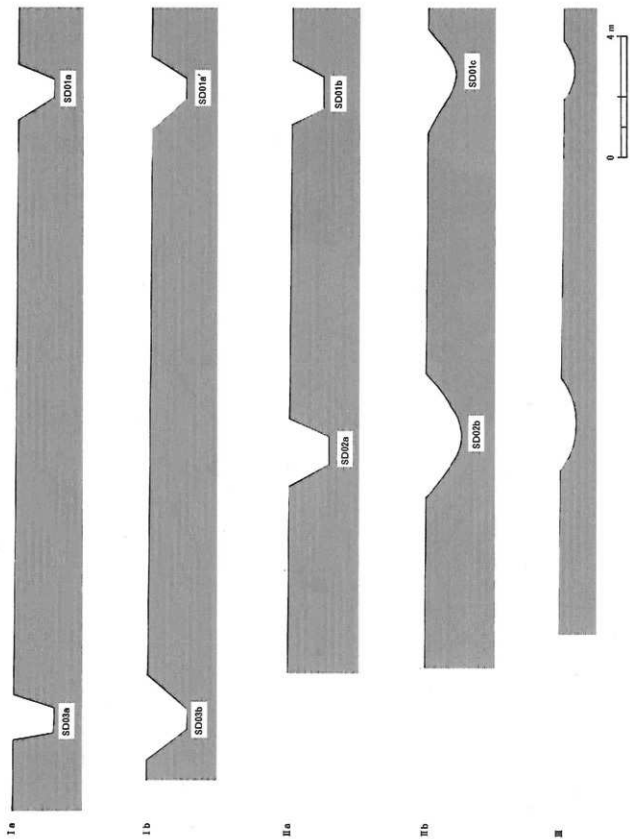
番 号	遺跡名	所在地	心 点 番 号	溝溝幅		深 さ	形 状	備 考	文 献	
				上 幅	下 幅					
1	新道平遺跡	南形領町	(7)	6.8	—	3.5	B		中山 1997	
2	藤久保遺跡	南形領町	(S.17)	2+a	—	60+a	B	I期	中山 1988	
				(S.12)	6.6	—	0.3	B		II期
				(S.15)	—	—	—	—		III期
3	南原遺跡	氏家町	(6)					詳細不明	中山 1997	
4	日枝神社南	河内町	9	2.2	0.8	0.9	A	埋土中より矢の跡出土	石川 1990	
5	笠根遺跡	河内町	7.5	1.9	1.3	0.75	A		遠藤 1993	
6	上野遺跡	宇都宮市		18	1.4	0.8	1.3	A	I期	
				8.5	2.8	0.96	1.2	B	II期	
				8.5	2.5	—	0.3	B	III期	
7	杉村遺跡	宇都宮市		12	1.4	—	0.5	A	I期	安藤 1997
				13	2.1	—	0.46	B	II期	
				(6)	0.72	—	0.3	A	III期	
8	三ノ谷遺跡	南河内町	—	2.75	0.8	0.5	A	1本のみ	小森 1987	
9	深沢(北並跡)	南形領町	13.25	0.9	0.5	0.4	A-B		田代 1994	
10	北台遺跡	梨分町	12.3	1.07	0.35	0.5	A	2時期有り	上三川1997	

第6表 県内推定東山道一覧表

- ※1 表番号は第19図番号と一致。
 ※2 ()は道幅を示す。また数値は平均値。
 ※3 数値は平均値。
 ※4 逆台形=A U字形=B



第19図 東山道ルート推定図 (『シンポジウム古代国家とのろし』参照)



第20図 溝変遷模式図

場合があり一概には言えないが、本遺跡で溝の断面観察からA→Bという変遷が捉えられており、概ねそのような変遷が想定される。

この2点を参考に、本遺跡の3本の溝を考えてみると、第20図のような変遷が考えられる。

I a 期 SD01 a とSD03 a が最初に掘られる。心々距離は18mで、側溝の形態は逆台形である。SD01 a とSD03 a はその断面形状及び規模さらに埋土状況が非常に近似しており、先にも述べたように、SD02 とSD03 は北上して切り合う可能性があることから、この組み合わせが想定できる。尚、他の遺跡の心々距離に比べて広い点及び、第II次調査区内をみる限りでは、SD01 とSD03 は離れていってしまうような気がするが、この点については後述する。

I b 期 SD01 a' とSD03 b の時期。北台遺跡で観察されたように、短期間の内に掘り返しがあったものと考えられる。SD01 a' としたが、こちらも同様な掘り返しがあったと想定できるが、I a 期に比べ深さが浅かったため、次のSD01 b の掘削によりその痕跡が消滅したものと考えられる。

II a 期 SD01 b とSD02 a の時期。心々距離は8.5mと狭く、日枝神社南遺跡とほぼ同じになる。側溝の形態は逆台形であるが、I 期に比べると底の幅が広がる。9層及び、その後の埋土状況からこの後の埋まり方は同様な変遷を辿るものと考えられる。

II b 期 SD01 c とSD02 b の時期。この段階に断面U字形の形態を採るようになる。規模が違うが杉村遺跡と同じような断面形態の変遷を辿る。

III 期 最終段階。道としての認識はあったと思われるが、側溝は深さ0.4mと非常に浅くなる。尚、SD02 の第14図10の土師器坏がほぼ正立し完形で出土していることから、この時期を示す資料と考えられ、この段階は10世紀代と考えられる。

I・II期に関しては、その年代を決定する遺物は出土していないが、他の遺跡例及び心々距離からするとI期は8世紀代、II期は9世紀代の可能性が考えられる。

最後にSD01が途中で平行せずに東に角度が触れることについて若干検討してみる。

SD01とSD02は、少なくとも第I次調査区及び第II次調査区の南側約200m区間は平行する。第18図に示すように、第II次調査区付近からこの台地は東に徐々に膨らむことから、一つの考え方としては、地形に沿ってその方向の修正をした結果、この場所でSD01の角度が変わった可能性が指摘できる。しかし、この考えでいくと、どうしてSD02の方も同様に屈曲しなかったかが疑問として残る。

もう一つの考え方としては、この周辺に駅家のような公的施設があり、そのためにこの区間だけ道幅を広げたという考えである。事実記載の中では時期不明と位置づけておいたが、SK01は円形有段土坑とも呼ばれ、中山氏によれば「氷室」の可能性があるという(中山 1996)。仮にそうであるとすれば、それを必要とする施設が近くに有ったことになる。また、SB02は1間×1間?の独立性であるが、その柱穴の掘り方は平面長方形で大型のものであり、西下谷田遺跡や上神主・茂原遺跡の大型掘立柱建物跡のそれに類似する。残念ながら調査区ギリギリの所に位置するため、建物の規模がその北に伸びるかは不明である。また、方位的にはSD03とほぼ一致する。以上のことから、SB02もこの時期の可能性が指摘でき、SK01と合わせてこの近くに何らかの施設があった可能性がある。尚、金坂氏が以前「衣川駅家」を比定されたのがこの付近(金坂 1978)、この台地の下の沖積地には「木ノ川」という小字が残っている。因みに新田駅家の比定地周辺と考えられる厩久保遺跡からは、推定ルート上で約17kmで、河内部の役所跡と考えられている多功遺跡までは約16kmとなる。これより若干南に金坂氏は田部駅家を推定されている。当時の駅家間の距離がほぼ16km毎であることから考えると興味深い数字である。また、東方約2.5kmのところには烽跡と想定される飛

山城跡が存在し、それとの関係も今後考える必要がある。

何れにしても限られた資料の中でしかも3本だけと仮定しての可能性を考えたに過ぎず、今後この沿線で調査が進み資料が増加した段階で再度検討を行う必要がある。

(参考文献)

- 安藤美徳 1997 「16 杉村遺跡」『宇都宮市文化財年報』第13号 宇都宮市教育委員会
- 石川 均 1990 「日枝神社南遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』〔平成元年度〕栃木県教育委員会
- 石野博信 1990 『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館
- 金坂清則 1978 「下野国」『古代日本の交通路Ⅱ』 大明堂
- 上三川勝 1993 『北台遺跡(推定東山道)』 園分寺町教育委員会
- 上三川勝他1997 『北台2号遺跡(推定東山道道路跡)』 園分寺町教育委員会
- 木下 良 1993 「古代の交通路と東山道」『シンポジウム「下野の東山道」』資料 栃木県歴史文化研究会・シンポジウム下野の東山道実行委員会
- 木本雅康 1992 「下野国郡賀・河内両郡における古代駅路について」『栃木史学』第6号 國學院大學栃木短期大學史学会
- 小森哲也 1987 『三ノ谷遺跡』(財) 栃木県文化振興事業団
- 今平利幸 1997 「飛山城跡発掘調査概要」『烽の道』 シンポジウム「古代国家とのろし」宇都宮市実行委員会
- 進藤敏雄 1993 「釜根遺跡」『シンポジウム「下野の東山道」』資料 栃木県歴史文化研究会・シンポジウム下野の東山道実行委員会
- 田代 隆 1994 『諏訪山・諏訪山北遺跡』(財) 栃木県文化振興事業団
- 中山 晋 1988 「付録 鴻野山地区推定東山道確認調査概要」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』〔昭和63年度〕栃木県教育委員会
- 中山 晋 1996 「古代日本「氷室」の実体—栃木県下の例を中心として—」『立正史学』第79号
- 中山 晋 1997 「下野国と東山道」『古代文化』第49巻第8号

脚

1. 縄文土器については、鈴木正博、塚本師也両氏にご教示いただいた。

写 真 图 版



①第I次調査区遠景（東より）



②第I次調査区北壁断面確認状況（南東より）



③北壁断面確認状況（南東より）



④SD01断面確認状況（南より）



⑤第I次調査区完掘状況（南より）



⑥第II次調査区遠景（南東より）



⑦調査風景（北西より）



⑧SI01完掘状況



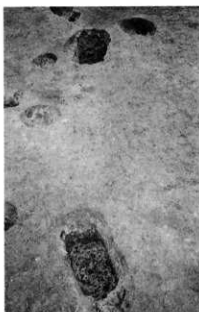
①SI02完掘状況



⑤SK01完掘状況



②SI02遺物出土状況



⑥SB01完掘状況



③SK01・SX01確認状況（南東より）



⑦SK09完掘状況



④SX01（南より）



①第Ⅱ次調査区確認状況（北西より）



②SD01完掘状況（南より）



③SD01埋土状況（南より）



④SD02完掘状況（南より）



⑤SD02埋土状況（南より）



⑥SD02遺物出土状況（南より）



⑦SD02（南より）



⑧SD02遺物出土状況（北西より）



①調査風景



③SD03埋土状況（南より）



②SD03完掘状況（北より）



④SD01・SD02（南より）



⑤SD01～SD03（南より）



⑥SD02・SD03（南より）



⑦SD02・SD03（北より）



①SI01出土遺物 (第 5 図)



②SI01出土遺物 (第 6 図 5)



③SI01出土遺物 (第 6 図 6)



④SI01出土遺物 (第 6 図 7)



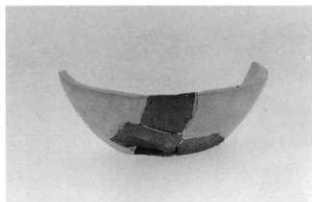
⑤SI02出土遺物 (第 8 図 1・2)



⑥SI02出土遺物 (第 8 図 3)



⑦SI02出土遺物 (第 8 図 4)



① 溝出土遺物 (第14図1)



④ 溝出土遺物 (第14図10)



② 溝出土遺物 (第14図9)



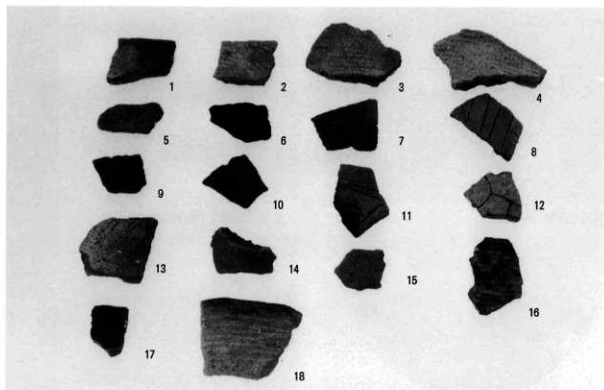
⑤ 溝出土遺物 (第14図11)



③ 「泉」 墨書土器



⑥ 溝出土遺物 (第14図12)



①表採遺物



報告書抄録

ふりがな	うわのいせき　　－すいていとうさんどうかんれんいせき－
書名	上野遺跡　　－推定東山道関連遺跡－
副書名	
巻次	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第43集
編著者名	今平利幸
編集機関	栃木県宇都宮市教育委員会
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5 Ⅷ028-632-2764
発行年月日	西暦1998年(平成10年)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上野遺跡	栃木県 宇都宮市 上野町 4144-1他			36度 分 秒	139度 分 秒	(I次) 19920521 ～ 19920530 (II次) 19930519 ～ 19930723	600 4,500	民間開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野遺跡	集落跡	縄文時代	住居跡 2	石鏃 石皿・磨石	「泉」墨書土器
	道路遺構	古代	側溝跡 3 土坑 掘立柱建物跡	土師器 須恵器	

正 誤 表

写真図版目次 P L 6

②溝出土遺物 (第4図9) → (第14図9)

④溝出土遺物 (第4図10) → (第14図10)

⑤溝出土遺物 (第4図11) → (第14図11)

⑥溝出土遺物 (第4図12) → (第14図12)

P24 第6表9 南那須町 → 南河内町

P25	ニ	多功遺跡	ニ	下野国府
	ホ	中村遺跡	ホ	多功遺跡
	ヘ	堂法田遺跡	ヘ	中村遺跡
	ト	那須官衙跡	ト	堂法田遺跡
	チ	飛山烽跡	チ	飛山烽跡
			リ	那須官衙跡

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第43集

上 野 遺 跡

平成10年3月発行

発 行 宇都宮市教育委員会文化課
(宇都宮市旭1-1-5)

TEL (028) 632-2764

印 刷 下野印刷株式会社
(宇都宮市宝木町1-28)

TEL (028) 622-6953
